

温泉街の集落形成～皆生・玉造温泉～

米田 宏美

I はじめに

II 温泉の概要

III 温泉の歴史

1) 皆生温泉

2) 玉造温泉

IV 温泉街の変遷—住宅地図を用いた分析—

1) 皆生温泉

2) 玉造温泉

V 現在の温泉街

1) 皆生温泉

2) 玉造温泉

VI おわりに

I はじめに

2001(平成13)年8月末、地理学野外調査実習の授業の一環として、島根・鳥取両県で調査をすることになった。自分でテーマを決め、それに関して自分の足をもって調査という形式であった。よって筆者は「温泉」を調査対象とした。旅行が好きで筆者として、ただ行ってみたいからである。温泉の街並と観光に目を向けて温泉街の集落の形成について調べて分かったことをこれから述べていきたいと思う。

II 温泉の概要

鳥取県西部の米子市、美保湾に面した弓ヶ浜半島の東端に山陰有数の皆生温泉がある。1900(明治22)年に、漁師が海中から泡立つ泉源を発見したことから始まった。ここは、東南に秀峰大山、北に美保関そして遥か水平線に隠岐島を望む景勝地である。その上白浜青松という日本独特の美しい海岸風景を残す海辺には、のどかな温泉の落ち着きとあいまって、開放的で明るいマリンリゾートの空気が満ちている。また環境省の「日本の水浴場88選」に選ばれている。日本でのトライアスロン発祥の地で、毎年7月下旬には「全日本トライアスロン皆生大会」が開催される。

食に関しては冬の味覚の代表として全国に知られる松葉ガニを代表格に、粒の大きさが際立つ夏の岩ガキなど、山陰は四季を通して旬のおいしさにあふれている。温泉の効能は、健康増進・皮膚病・婦人病・胃痛・神経痛・運動器障害・虚弱児童などで、泉質は、70～85℃の含塩化土食塩泉で、要は海の恵みの「塩の温泉」である。

一方、玉造温泉は島根県の県都松江市の西南約8km、三方を山に囲まれた全国でも有数の温泉地として玉造温泉がある。出雲観光や山陰観光の拠点となっている古い歴史を持つ温泉である。また温泉の東部にある花仙山^{かせんざん}を中心とする丘陵から、かつては良質の赤めのう、青めのうが産出し、古代“玉作りの里”としても知られている。温泉の効能は、神経痛・慢性皮膚病・慢性婦人病・慢性消火器病・動脈硬化症などで、泉質は、50～72度の硫酸鉛、塩化物泉である。

なお、両温泉の詳しい概要に関しては、本報告書『皆生温泉と玉造温泉の現状とこれから』のIIを

参照されたい。

Ⅲ 温泉の歴史

1) 皆生温泉

明治初期、1867（明治10）年に海中に温泉を発見した（第1表）。その少し後、1900（明治33）年に、皆生海岸の浅瀬に湧き出す熱湯を偶然にも漁師山川忠五郎氏が発見した。この温泉を利用しようと1911（明治44）年春、八幡市次郎氏が向こう10年間の温泉の権利を譲り受けて、温泉経営に着手した。波打ちぎわだったものの、泉源を本格的に掘り、エンジンポンプで送泉し、すでにあった村湯に供給するとともに、コンクリートの浴そうを造って営業した。1915（大正3）年、松風館と名づけた民宿に似た温泉業が初めて開業された。このころから皆生温泉は村湯（公衆浴場）、長生館、それに松風館が、湯治のための温泉場として山陰地方に知られるようになった。この“三湯”は1921（大正9）年ごろまで続いた。松風館は年間を通じて繁盛したものの、日本海の荒波には勝てず、泉源の鉄管を折られ、経営に四苦八苦した。その八幡氏の苦勞を見かねた有本松太郎氏は、安全なところに泉源を開発し、市街地を計画することを考えた。その後、有本氏は八幡氏から権利を引き継ぎ、開発に乗り出した。

1922（大正10）年、有本氏は皆生温泉土地株式会社を設立し、温泉街

第1表 皆生温泉史

1867(明治元)年	海中に温泉発見
1900(明治33)年・9月	山川忠五郎氏海岸で温泉を発見
1911(明治44)年・4月	八幡市次郎氏温泉経営に着手
1921(大正9)年・6月	有本松太郎氏本格温泉経営に着手
1922(大正10)年・5月	皆生温泉土地株式会社設立(初代社長有本松太郎氏)、温泉街開発に着手
11月	一ノ源泉湧出
1923(大正11)年・6月	初の本格旅館大山館・静養館開業
7月	温泉配給開始 果合自動車米子、車尾、皆生間開業
1924(大正12)年・2月	検番(千鳥、明月、共立)開業 電話開通
5月	公園開設 公園温泉(公衆浴場)開業
1925(大正13)年・7月	皆生郵便局開業
1926(大正14)年・4月	電車米子角笠町、皆生間開通
8月	山陰パラダイス開館(～1929)
12月	県道米子、皆生間、現皆生通り完成
1927(昭和2)年・10月	温泉神社鎮座
1929(昭和4)年・5月	皆生競馬場完成、第一回開業(～1937、47～48)
1933(昭和8)年・10月	波浪浸食により温泉源危機にひんす(以後連年あり)
1934(昭和9)年・10月	坂内義雄氏有本氏より温泉経営を承継
1935(昭和10)年・9月	一号泉波浪のため海没、以後配湯制限
1936(昭和11)・5月	温泉クラブ(人衆娯楽施設)開業
8月	新一号泉湧出、温泉復活
1937(昭和12)年・11月	陸軍転地療養所開所、傷痍軍人旅館分宿(～1940)
1938(昭和13)年・3月	福生村、米子市と合併、皆生、米子市内となる 陸軍病院(後国立米子病院、～1971)竣工
11月	米子、皆生間電車が廃止され、バスとなる
1943(昭和18)年・8月	大山館市1健民修練所へ、この頃より旅館寮に転向(～1946)
1944(昭和19)年・3月	学業営業停止により検番廃業(～1950)
11月	波浪に乗った松の流木により新一号泉倒壊
1945(昭和20)年・11月	温泉クラブ、進駐軍のダンスホールに(～1949)
12月	波浪により温泉送泉塔倒壊、配湯機能壊滅
1947(昭和22)年・9月	果により護岸(突堤)工事始まる
1949(昭和24)年・6月	内陸に六号源泉湧出、温泉蘇生
1952(昭和27)年・4月	サワバス運行、米子、皆生間山の丸バスと競合路線になる
1953(昭和28)年・9月	皆生小唄、神楽坂はんく吹込み
1953(昭和28)年	この頃より臨時列車単位の団体受入れ
1954(昭和29)年・8月	米子市上水道皆生に入る
1955(昭和30)年・11月	海岸護岸(植堤)果により着工
1958(昭和33)年・7月	有本胸像除幕
1959(昭和34)年・4月	皆生温泉ヘルスランド開館
1960(昭和35)年・3月	海岸遊歩道完成
1960(昭和35)年	この頃よりスノー劇場出現
1960(昭和35)年・12月	海岸護岸工事建設省直轄となる
1961(昭和36)年・9月	清風荘旅館初の鉄筋コンクリート建に改築
1964(昭和39)年・3月	皆生土地区画整理完了、海浜公園出現、温泉街西へ広がる
4月	皆生発大山定期観光バス開始
11月	東光園8階建ビル完成、高層化のさきがけ
1965(昭和40)年・5月	天皇、皇后行幸啓、東光園にご宿泊
1966(昭和41)年・5月	生田春月碑除幕
1967(昭和42)年・8月	第一回温泉まつり
11月	都市ガス皆生に入る ホテル業自由化
1968(昭和43)年・3月	持生通り拡幅、歩道付4車線完成
1969(昭和44)年	この頃よりトルコ浴場出現(鷹)
1971(昭和46)年・6月	離岸防崩堤着工、砂浜の蘇生へ
1972(昭和47)年・8月	皆生温泉開発50周年記念祭 国鉄ディスカバージャパン賞進める
1974(昭和49)年・6月	グイラー番館完成、高層マンション出現
1977(昭和52)年・12月	皆生温泉推進協議会発足、皆生諸団体を糾合
1978(昭和53)年・7月	公認皆生海水浴場復活(20年ぶり)
1979(昭和54)年・4月	皆生温泉浴場(公衆浴場)開業
1980(昭和55)年・11月	皆生温泉公園、西部健康増進センター開所 下水道処理施設使用開始
1981(昭和56)年・8月	皆生温泉開発60周年記念式挙行 第一回トリアスロン(鉄人レース)全国にさきがけて挙行

出典)山陰中央新報社(1981)などを基幹に作成。

開発に着手した。この温泉開発は、都市計画に基づくケースとして、当時、他の温泉街をうならせた。一号源泉が湧出し、1924（大正12）年には温泉街造りはほぼ終わった。中央には、皆生から米子に通じる道路の車尾街道の延長である幅10.8mの三条通りが造られた。その入り口に「皆生温泉」と書かれた大きなゲートが掲げられた。この三条通り海岸の突き当たりには一号泉があった。この西側に四条通り。三条通りと四条通りは公園をはさんだ。そして三条通りと四条通りが旅館商業地帯、三条通りの東の二条通りが別荘地帯として区分されていた。

皆生温泉土地株式会社の一号泉開発と、都市計画に基づく温泉街造りは、旅館ラッシュをもたらした。1923・24（大正11・12）年内に、二条通りに日の出館、三条通りに満寿屋・松の湯・静養館、四条通りに松露園・亀の家が次々に開業した。同時期に場所は定かではないが、大山館・朝洋館・浜屋・松井館が開業した。この中でひととき大きかったのは大山館と静養館で、大山館は1952（昭和27）年に解体されたが、静養館は国鉄の「友恭寮」として利用された。この「友恭寮」は1982（昭和57）年以降の地図には見られなくなった。

開発の中で、皆生温泉土地株式会社が大衆の中に溶け込むために考えたのが、公衆浴場「公園温泉」の建設だった。これは1924（大正12）年4月末に完成し、5月1日から営業を始めた。通過客はむろんのこと米子の住民に大人気だった。このころ、電車の開通で刺激された旅館業者によって、四条通りの海岸寄りに「山陰パラダイス」が開業した。ひと口に言えば娯楽センターで、大変な人気があった。しかしこの楽園も5年後の1929（昭和4）年、火事で廃業してしまった。

有本氏は様々なアイデアを出す中で、上記と同年1924（大正12）年7月、「米子電気軌道株式会社」を設立した。当時の米子～皆生温泉間の交通機関は、路面電車が手っ取り早く、しかもメリットがあると考えたのだろう。わが国で最初の営業用路面電車が走ったのは（明治28）年の京都であった。有本氏はこの営業成績も参考にしたい。電車が動いたのは1926（大正14）年4月で、当初は、米子町角盤町を起点とし、皆生温泉四条通り公園西側まで走った。そして、翌1927（大正15）年1月、角盤町から灘町回りで米子駅まで、1928（昭和3）年1月、市役所前の米子中央線が開通した。当時はチンチン電車で、至極のんびりしたものだったが、京阪神からやってくる客に大人気であった。この電車は米子～皆生温泉間の交通の動脈となっていたが、1938（昭和13）年、大陸侵攻の野望をたぎらせていた軍の命令で廃止され、レールは兵器となってしまった。米子電気軌道株式会社は米子交通株式会社と社名を改め、バス会社として再出発した。これ以降は電車の代わりにバスを走らせ始めた。1928（昭和3）年に、陰陽を結ぶ国鉄の大動脈となる伯備線が全線開通した。これまで、京阪神からは山陰線を利用してやって来たが、山陽・四国方面の客は交通機関がなかったため、どうしても誘致できなかった。しかし、伯備線の開通によって、米子は山陰のすべての拠点となり、広域観光の幕開けとなった。

1967（昭和42）年に第一回温泉まつりが開かれた。後に米子市のがいな祭りの一環として、加えられた。このまつりは毎年8月に行われ、海浜公園を舞台に温泉らしい盛りだくさんの行事が繰り広げられる。

第二次世界大戦という暗い時代が終わると、皆生温泉はレジャーに目を向け始め、急激に発展した。

1953（昭和28）年には、広島～米子間、土日に快速「ちどり」運転開始された。これにより、広島方面からも列車1本で容易に来ることが可能になった。そして1954（昭和29）年には定期運行されるようになったが、1980（昭和55）年で廃止された。一方、皆生温泉土地株式会社は1959（昭和34）年に大衆施設である皆生温泉ヘルスランドを開館した。1978（昭和53）年10月国鉄、キャンペーン「いい日旅立ち」が展開された。

鳥取県西部地域は、中国横断自動車道岡山米子線、JR伯備線など関西・山陽・四国方面との交通アクセスが整っており、広い地域からの集客が見込める地域である。特に中国横断自動車道の内、米子自動車道は1992（平成4）年に開通し大きな恩恵をもたらしたが、反面その効果を十分に享受できなかったとの指摘も多かった。岡山自動車道の完成により、1997（平成9）年に中国横断自動車道岡山米子線が全線開通したことから、集客能力がさらに向上しているため、最近では受け入れ体制の一層の整備が望まれる。

2) 玉造温泉

玉造温泉は、わが国で最古の歴史をもち、大国主命と共に国造りをした少彦名命^{すくなひこなのみこと}の発見と伝えられている。記録が最初に見られるのは、733（天平5）年に編纂された『出雲国風土記』である（第2表）。その中には次のように記されている。「ひとたびすすげば形容うるはしくなり再び浴^ゆすれば、万病ごとごと^{ごとごと}にのぞこる。古より今に至るまで、験^{しるし}を得ざることなし。故に余のひと名づけて神湯といえり（一度温泉を浴びればたちまち姿も麗しくなり、再び浴びればどんな病気もすべてなおる。昔から今にいたるまで効き目がないということがない。土地の人は神の湯と言っている）」。この描写から当時の玉造温泉の盛況が伝わってくる。平安時代に書かれた清少納言の『枕草子』にも「湯は七久里の湯、有馬の湯、玉造の湯」との記述があり、玉造温泉のことが遠く京の都にも聞こえていたことがわかる。この後にも様々な書物に玉造温泉の存在が確認される。1650（慶安3）年の『玉造温湯之由来』には、1573～92年にも洪水と地震で跡形もなく流されたとある。玉造のお湯は、もともと川原に湧き出していたもので、大雨でもふればひとたまりもない状況にあった。

江戸時代には現在の玉造湯神社のある区域に温泉があった。元湯（泉源）、公衆浴場、湯宿などの温泉施設があり、村の中心であった。元湯を中心に村ができたと言ってもいいだろう。しかしこの区域には現在では泉源も温泉街もない。明治以降、北側に広がっていた、かつての水田地帯に旅館街が移ったのだ。

そしてまたこの時代には松江の藩主が玉造温泉の一角に設けられたお茶屋を訪れ、温泉を楽しみ、疲れを癒した。お茶屋は1600年代の早い時期には存在していたと推定されている。松江藩から温泉を預かり、その一切を取り仕切る世襲の役職・湯之助もこのころ存在した。湯之助は、湯所を支配、公衆浴場を経営して入場料をとり、他の湯宿にも分湯して湯賃をとっていた。湯之助は明治末まで世襲された。

明治期に入ると旅館が増加するが、宿泊料の安い粗末な木賃宿や旅籠が中心であった。1890（明治23）年になると長楽館・保性館・米子館・豆腐屋・玉井館・川原屋・白石屋・青砥屋・松の湯・伊藤

旅館の10軒があり、大正年

代まで続く。松の湯は1921

(大正10)年に松江の松崎

水亭から分家して玉造に進

出した(写真1)。このころ

からボーリングがさかんと

なり、長楽園のボーリング

試掘成功により、温泉集落

がこれまでの温泉湧出地域

からはなれた土地につくら

れるようになる。当時の湯

元は長楽園・玉井館・新宮

めのう屋・保性館・新宮千

代蔵宅であった。玉造温泉

が全国的に再び有名になり、

城崎、三朝、皆生と共に山

陰の観光地郡の中で中核的

な観光客滞留拠点の一つに

なったのは、大正末期から

昭和初期である。これは山

陰鉄道線の建設、特に京阪

神との直結による点が大き

い。

昭和に入ると、1940(昭

和15)年には、旅館も14

軒となる。この時期に6軒

の新規営業があり、これま

での2軒の廃業軒数を除し

て合計14軒となった。

戦争が激しくなり日本の敗色が濃くなってきた1943(昭

和18)年ころから温泉旅館等は制限を受け、翌年には営業

の止む無きに到った。ある旅館は海軍の兵隊の宿舎になっ

ていたし、あるいはまた、広島・松江陸軍病院の分院とな

ったり、軍需工場の寮となったりして、それぞれ軍に協力

していたのである。一時的に、玉造温泉そのものが完全に

第2表 玉造温泉史

奈良	733(天平5)年	『出雲国風土記』編纂
平安	11世紀初	『枕草子』に玉造温泉の記述がみられる
鎌倉	1208(承元2)年	中原季元、佐草神主のお供により、玉造の湯へ入浴
室町	初期(1310(延慶2)年の説あり)	洪水で埋没した温泉を再興し、湯薬師を祭る
安土桃山	天正年間	大地震、大雨で温泉埋没
江戸	1607(慶長12)年	玉作薬師堂に武運長久を願い、銘口が奉納される
	1626(寛永3)年	柳尾忠晴、温泉復興し、御茶屋、薬師堂を造る 湯之助役任命される
	1641(寛永18)年	松平直政、御茶屋を修復
	1650(慶安3)年	長谷川三宮喜雅、「玉造湯湯之由来」をあらわす
	1662(寛文2)年	玉造村検地帳に、湯納屋敷と御茶屋敷が出てくる
	1689(元禄2)年	吉兵衛屋敷で泉源掘削(新湯)
	1708(宝永5)年	前年の地震で湯の出悪くなり、普請願 このころ玉造温泉の宿屋26軒(湯乃助、新湯含む)
	1724(享保9)年	公衆浴場、湯之助湯屋火災で焼失
	1754(宝暦4)年	このころの湯宿の数18軒
	1759(宝暦9)年	公衆浴場洪水で流出
	1764(宝暦14)年	寛字郡玉造村温泉旧記辛出版を松江藩へ提出 玉造村温泉旧記指出帖
	1766(明和3)年	御茶屋建替のため地鎮祭 玉造湯神社宮司、上御入湯日記留をつけはじめる(〜明治3年) 湯乃助忠蔵亡くなり、第筆三(助三郎)跡を継ぐ
	1789(寛政1)年	松江藩主、お茶屋入湯の最初の記録(以後再々入湯)
	1791(寛政3)年	湯乃助湯屋隠居し、湯の女吉(孫三郎)へ代替り
1799(寛政11)年	湯薬師堂本尊御開帳	
1803(享和3)年	治郷、湖南玉造桑原神社の掛軸を玉造湯神社に奉納	
1813(文化10)年	宿屋(1軒運盟)から湯釜増加反対の請願	
1819(文政2)年	御入湯御用御宿割帳	
1823(文政6)年	湯乃助孫三郎から子の三郎左衛門へ代替り	
1831(天保2)年	御入湯御用御宿割帳	
1833(天保4)年	湯乃助三郎左衛門病死につき、子の新市朗へ代替り	
1845(弘化2)年	このころ安政の大獄で刑死した瀬樹三郎、玉造温泉に隠棲	
1870(明治3)年	湯乃助、元湯と湯坪の権利を申請。明治政府許可(明治6年)	
1871(明治4)年	湯乃助、泉源の新掘削中止の嘆願書提出	
1884(明治17)年	玉造温泉に人力車が走り始める	
1888(明治21)年	市町村制公布。合併により、湯町村と玉造村誕生	
1890(明治23)年	温泉旅館10軒	
1891(明治24)年	ヘルン、玉造温泉へ来遊	
1892(明治25)年	山陰道を改修し、長門街道として(現国道9号)竣工	
1901(明治34)年	このころ元湯の湧出量減少	
1905(明治38)年	玉造村と湯町村が合併し、玉湯村ができる	
1907(明治40)年	仲田貞次郎、共同浴場の泉源掘削。泉温51.5度。 このころから温泉乱掘時代(〜大正11年ころ)	
1909(明治42)年	山陰本線松江・宍道間開通、湯町駅設置 長楽園に大露天風呂完成	
近代以降	1911(明治44)年	このころ温泉宿10軒営業。7軒が湯乃助に分湯料年間20円支払い 湯普請申請(長谷川氏)。村から対抗して、河川使用願い提出。 県、村に使用許可。長谷川氏側から県へ陳情書
	1912(明治45)年	山陰線京都今市間完成。玉湯川の両岸に桜を植樹。
	1913(大正2)年	村営のタンク川中に完成。村営温泉として配湯
	1922(大正10)年	千代の湯で温泉掘削。大量の湯がわく
	1932(昭和7)年	湯町駅と玉造温泉間に定期運行バス開業
	1949(昭和24)年	湯町駅を玉造温泉駅と改称
	1953(昭和28)年	玉造温泉の泉源12カ所、公衆浴場4カ所、旅館21軒
	1958(昭和33)年	松江・玉湯間の有料道路開通
	1960(昭和35)年	温泉開発ブームで、観光客数増える傾向
	1964(昭和39)年	記録的な集中豪雨で被害
	1967(昭和42)年	ホテル業自由化
	2000(平成12)年	温泉旅館27軒

出典)玉湯町立出雲玉作資料館(1997)などを参考に作成。



写真1 大正時代の松乃湯のポスター

その形態を失ってしまっていた。そのうち、ただ1軒のみ、保性館が旅館として営業を続けていたということである。

第二次大戦後は復興の兆しがみえ始めた。1945（昭和20）年終戦直後には13軒の旅館があった。青砥屋・白石屋・米子館・豆腐屋・玉井館・長楽園・保性館・暢神亭・松乃湯・玉静館・鶴の湯・有楽、それに湖岸の八勝園であった。また一畑電鉄が戦後まもなく玉造～北松江（松江温泉）間に1日5往復、玉造温泉～湯町駅（玉造温泉駅）間に1日7往復の定期バスを運行していたが、その後さらに本数を増加させた。1947（昭和22）年には、玉造温泉観光協会が発足し、観光宣伝及び国の復興機運に乗って観光客が激増した。1949（昭和24）年には1909（明治42）年山陰線開通以来の「国鉄湯町駅」を「玉造温泉駅」と改称した。これはその後の観光宣伝にも非常に効を奏した。また1951（昭和26）年には、玉造温泉経由の松江～広島間の急行バスの運行を始めた。そして1952（昭和27）年頃から歓楽温泉的色彩が濃厚となり、旅館も18軒となった。1955（昭和30）年ごろからの観光旅行ブームにより、旅館は別館建設の時代に入る。1958（昭和33）年7月松江～玉造間有料道路（松江道路）開通した（現・国道9号）。1965（昭和40）年頃になると、交通網の整備が進んだことに加え、ディスカバー・ジャパンの風潮を受けて「山陰観光ブーム」が起こり、以後入込客数は爆発的な伸びをみせた。1971（昭和46）年には23軒の旅館があった。1972（昭和47）～1973（昭和48）年にはそのピークを迎えた。

しかし、1973（昭和48）年後半には、オイルショックによって玉造温泉も観光産業の不景気をむかえた。これに伴って当然消費額も減少した。1976（昭和51）年から1979（昭和54）年までは、やや持ち直した観もあったが、1980（昭和55）～1981（昭和56）年には、消費者物価の上昇による所得や消費の伸び悩み、そしてガソリンの価格の高騰などにより、再び入込客数は減少に転じた。都市計画の一環として1974（昭和49）年に造成された出雲玉作史跡公園と1977（昭和52）年に出雲玉作資料館の建設がみられたが、これだけでは観光客の多くを呼び込める程の観光資源とはならず、また駐車場不足が深刻であることに変わりはなかった。その後の1982（昭和57）年には、島根県でくびき国体が開催されたことや、1984（昭和60）年頃から再び起こった温泉ブームをうけて、順調に復活していった。

1991（平成3）年、『ふるさと創生資金』による温泉開発ブームから公的セクターによる温泉保養施設の建設が相次いだ。玉造温泉でも「ゆ～ゆ」が建設され、成功を収めている。これは日帰り客の増加に大きく貢献している。このほかにも、浜田自動車道の開通による日帰り客の増加などが影響していると思われる。

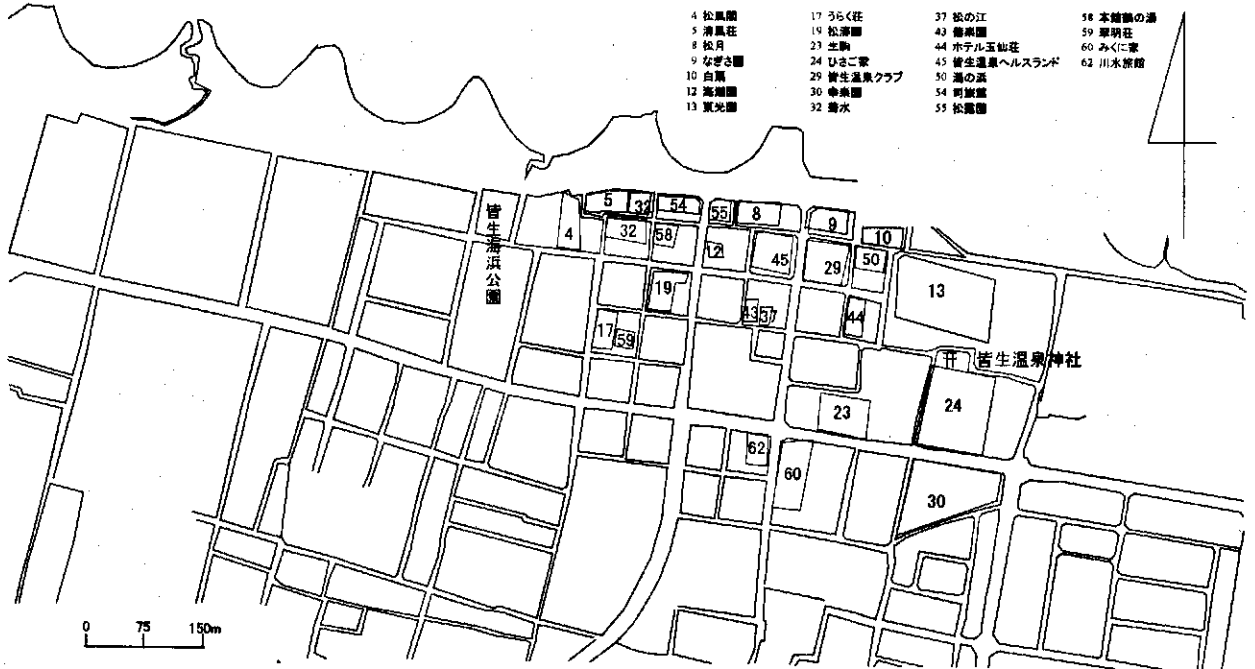
IV 温泉街の変遷—住宅地図を用いた分析—

1) 皆生温泉

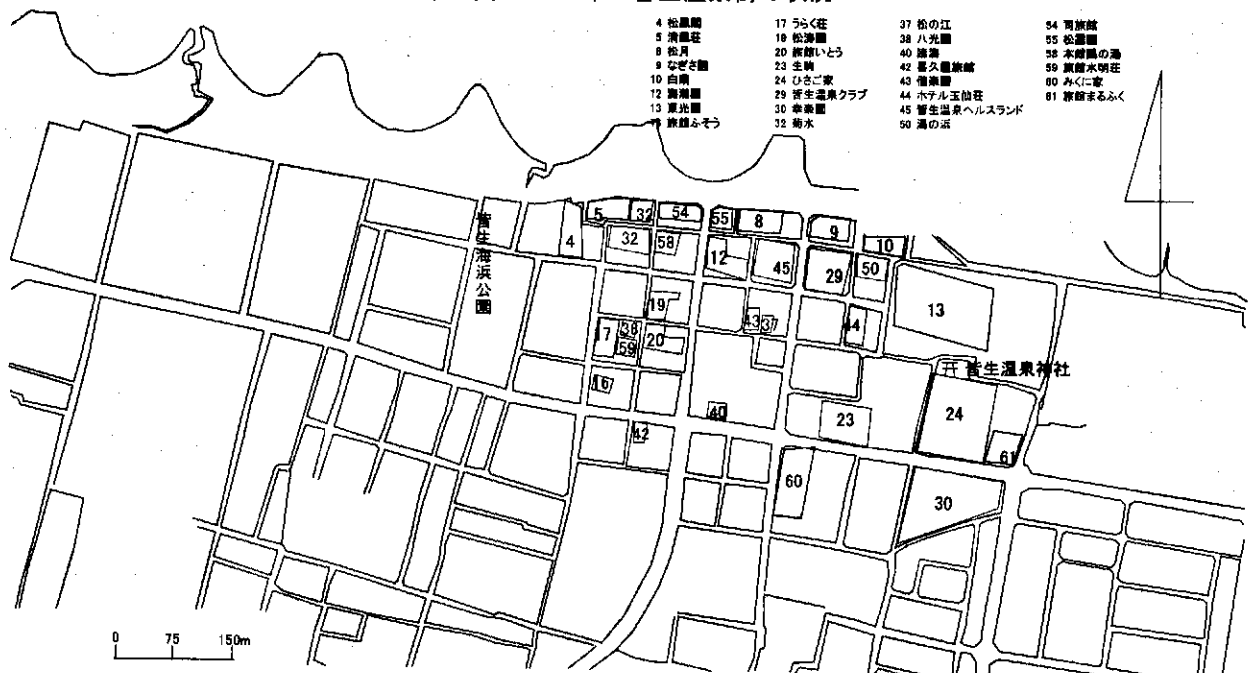
皆生温泉の住宅地図は1963（昭和38）年から2001（平成13）年までを入手することができた。この分析はこの9枚の住宅地図による。

1963（昭和38）年には皆生温泉街には23軒の旅館が見られる。そして旅館ではないが皆生温泉ク

ラブや前述の皆生温泉ヘルスランドという娯楽施設もある（第1図）。1967（昭和42）年には「翠明荘」が改名したと思われる「旅館水明荘」があり、「川水旅館」はなくなり、その場所には「鶴野湯別館」が見られる。そして新たに、「グランドホテル」・「ふそう別館」・「旅館いとう」・「旅館八光園」・「ホテル臨海」・「喜久屋旅館」・「旅館まるふく」の7軒が建ち、30軒の旅館がある（第2図）。1967（昭和42）年からホテル業が自由化されたため、続々と旅館が建ち並んでいったと思われる。



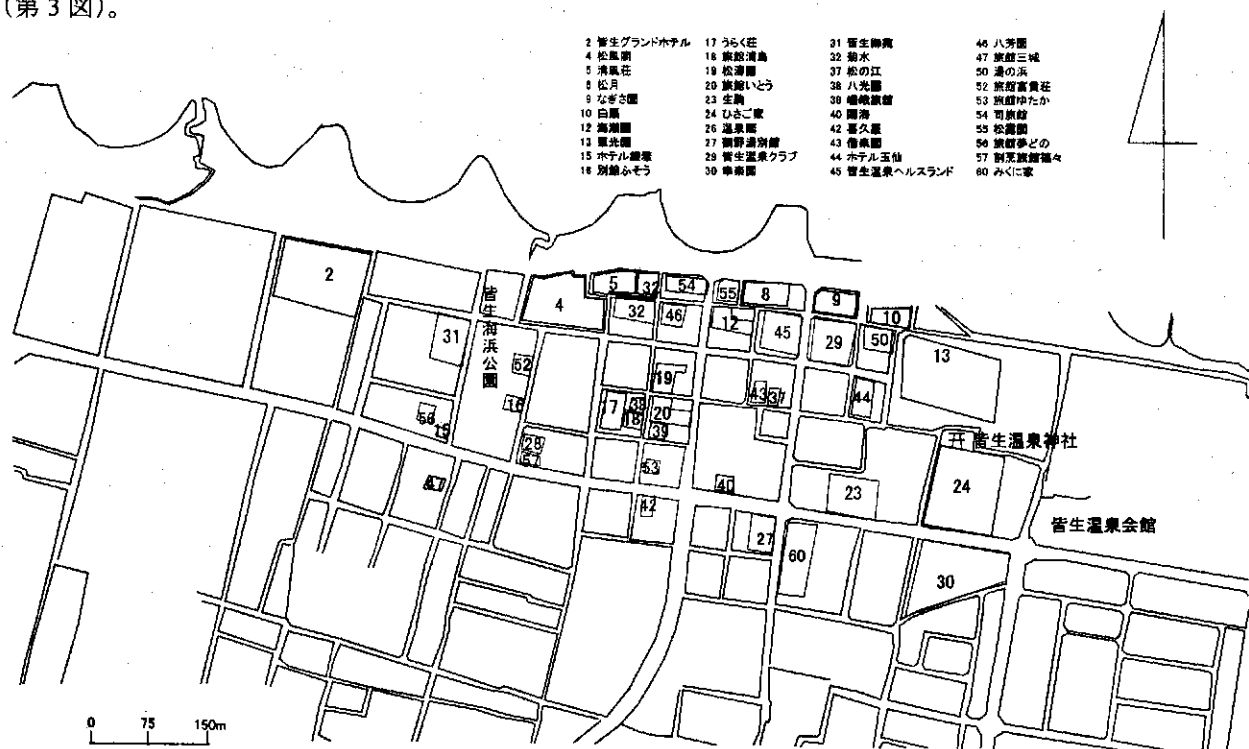
第1図 1963年の皆生温泉街の状況



第2図 1967年の皆生温泉街の状況

1972（昭和47）年には、「旅館水明荘」の場所には「旅館浦島」が、「本館鶴の湯」の場所には「旅館八芳園」ができた。「旅館まるふく」はなくなっている。また新たに営業をはじめた、「ホテル銀雅」・

「旅館三城」・「温泉閣山田」・「皆生御苑」・「嵯峨旅館」・「旅館ゆたか」・「割烹旅館福々」・「旅館富貴荘」・「旅館夢どの」の9軒を含む38軒が営業している。この年には皆生温泉会館という建物ができる(第3図)。



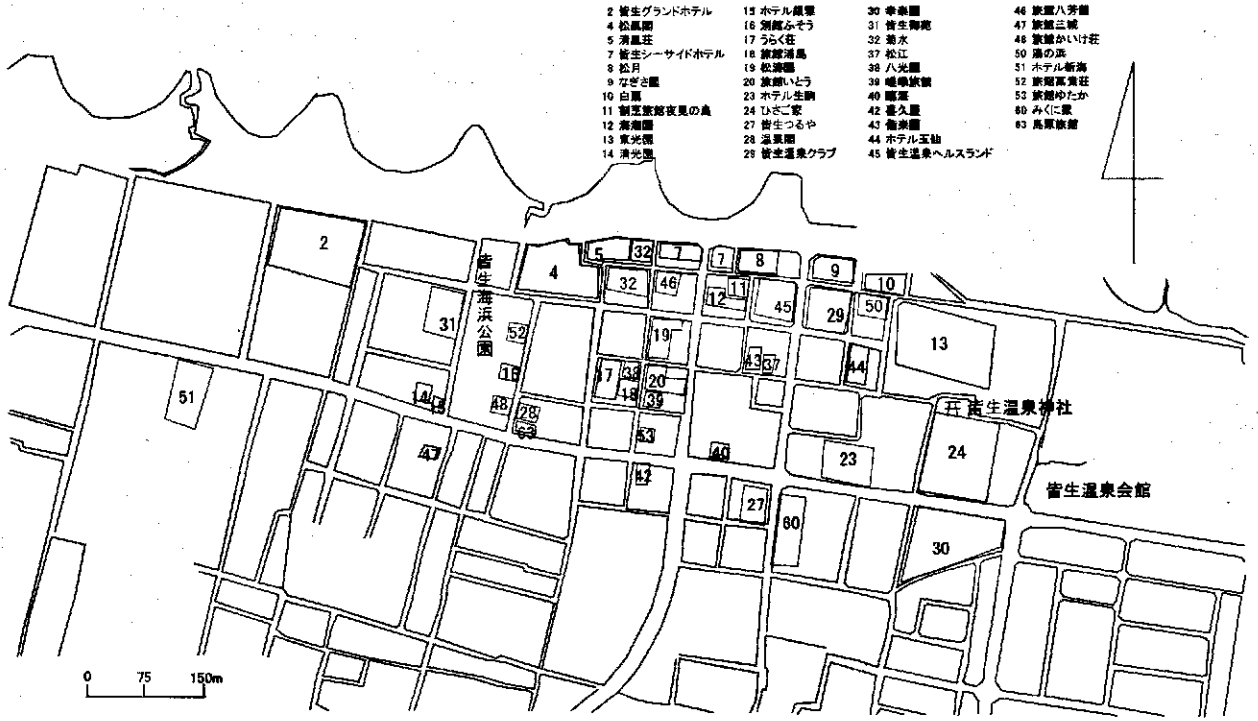
第3図 1972年の皆生温泉街の状況

1977(昭和52)年には、「司旅館」と「松露園」の場所に「皆生シーサイドホテル」,「鶴野湯別館」の場所に「皆生つるや」の名前が見られる(第4図)。「皆生シーサイドホテル」はヒアリング調査によると1956(昭和31)年創業とのことだが、実際その名前が見られたのは1977(昭和52)年からのので、「司旅館」・「松露園」のいずれかが改名したのかもしれないが定かではない。「皆生つるや」は1961(昭和36)年創業なので、こちらはおそらく「本館鶴の湯」と「鶴野湯別館」の改名した後と思われる。「割烹旅館福々」は「島原旅館」に変わり、「旅館夢どの」は廃業している。新たに「割烹旅館夜見の島」・「清光園」・「旅館かいけ荘」・「ホテル新海」の4軒が営業をはじめ、旅館は40軒にものぼり、皆生温泉は最盛期を迎えた(第5図)。

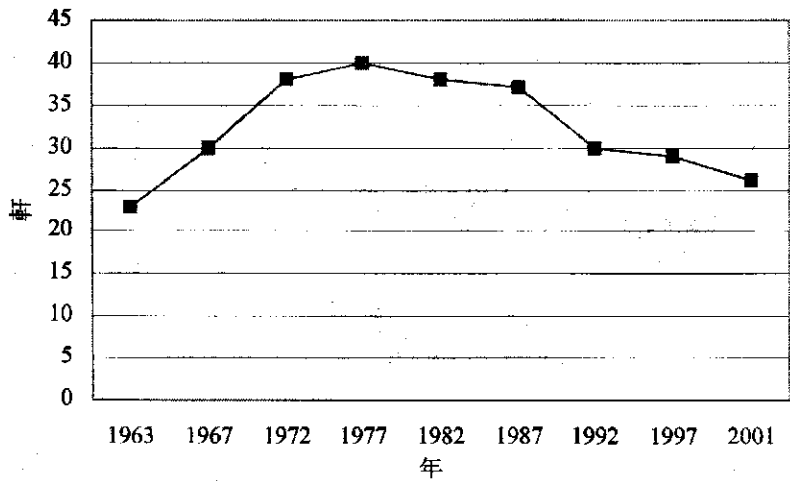
1981(昭和56)年夏、日本で初めてのトライアスロンがこの地で開催された。1982(昭和57)年「嵯峨旅館」が改名したと思われる「ビジネスホテル嵯峨」が存在している。「島原旅館」は「旅館汐の井」に変わっている。「旅館ゆたか」・「湯の浜」・「ホテル新海」・「旅館富貴荘」の4軒は姿を消した。新たに「皆生ホテル」・「旅館きらく」の2軒ができて総数は38軒になっている(第6図)。

1987(昭和62)年には、「旅館三城」の場所には「岩崎館」がある。「旅館八芳園」・「旅館かいけ荘」・「旅館汐の井」・「旅館きらく」の4軒はなくなっている。前の「旅館ゆたか」の場所には新たに「旅館満石」ができ、その他にも「華水亭」・「ビジネスホテル皆生温泉」が新しく建った。旅館の数は37軒になる。「皆生温泉クラブ」は「皆生温泉浴場」に、「皆生温泉ヘルスランド」は「皆生温泉」とな

っている。またこの年から温泉娯楽施設「オーシャン」が見られる（第7図）。



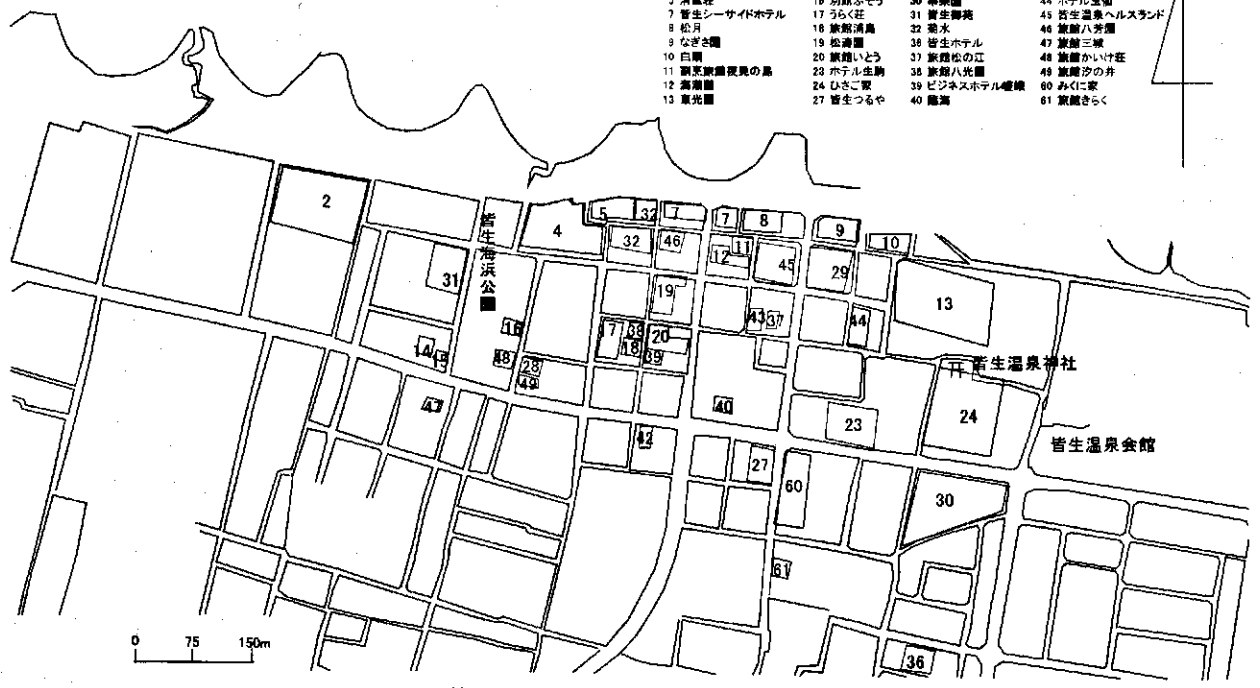
第4図 1977年の皆生温泉街の状況



第5図 皆生温泉の旅館数の変遷

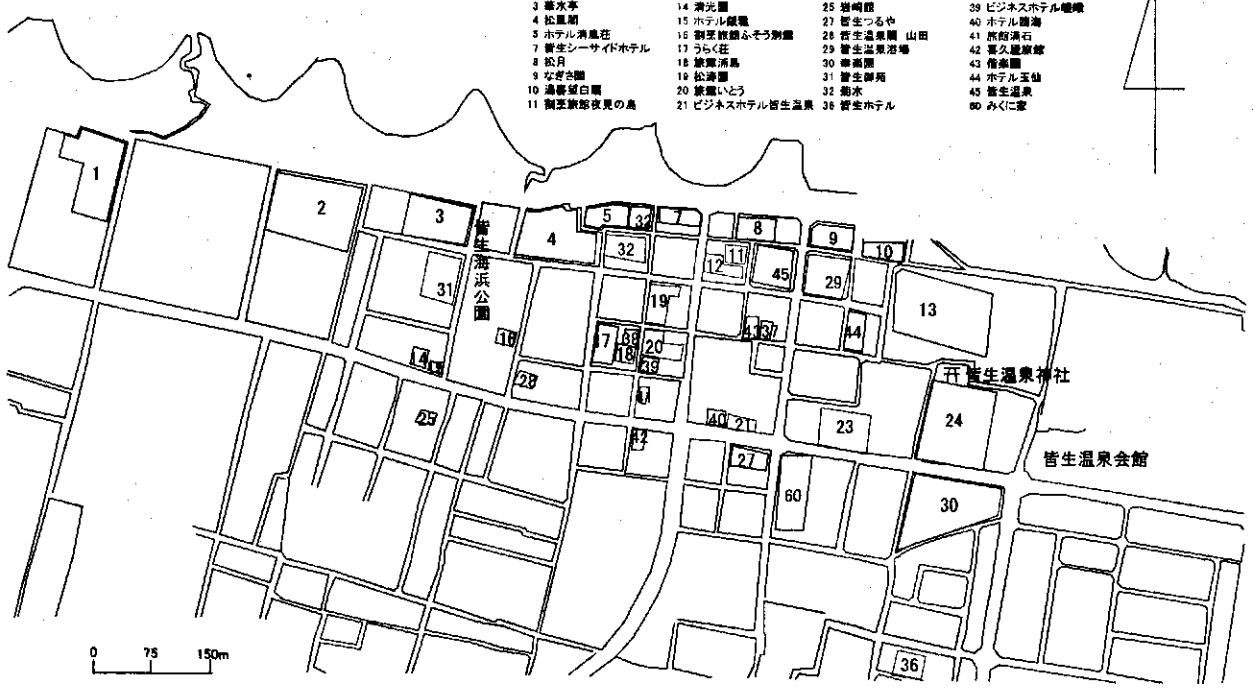
出典)『住宅地図』各年度版を参考に筆者作成。

- | | | | |
|--------------|----------|--------------|---------------|
| 2 皆生グランドホテル | 14 清光園 | 28 温泉園 | 42 喜久屋旅館 |
| 4 松風園 | 15 ホテル遊楽 | 29 皆生温泉クラブ | 43 信楽園 |
| 5 清風荘 | 16 別荘ふもろ | 30 赤泉園 | 44 ホテル玉仙 |
| 7 皆生シーサイドホテル | 17 うらく荘 | 31 皆生御苑 | 45 皆生温泉ヘルスランド |
| 8 松月 | 18 旅館清風 | 32 松水 | 46 旅館八芳園 |
| 9 なぎさ園 | 19 松清園 | 38 皆生ホテル | 47 旅館三城 |
| 10 白明 | 20 旅館いとう | 37 旅館松の江 | 48 旅館かいけ荘 |
| 11 温泉旅館夜見の島 | 23 ホテル生駒 | 38 旅館八光園 | 49 旅館沙の井 |
| 12 海瀾園 | 24 ひまご家 | 39 ビジネスホテル嵯峨 | 60 みくに家 |
| 13 東光園 | 27 皆生つるや | 40 臨海 | 61 旅館さくら |



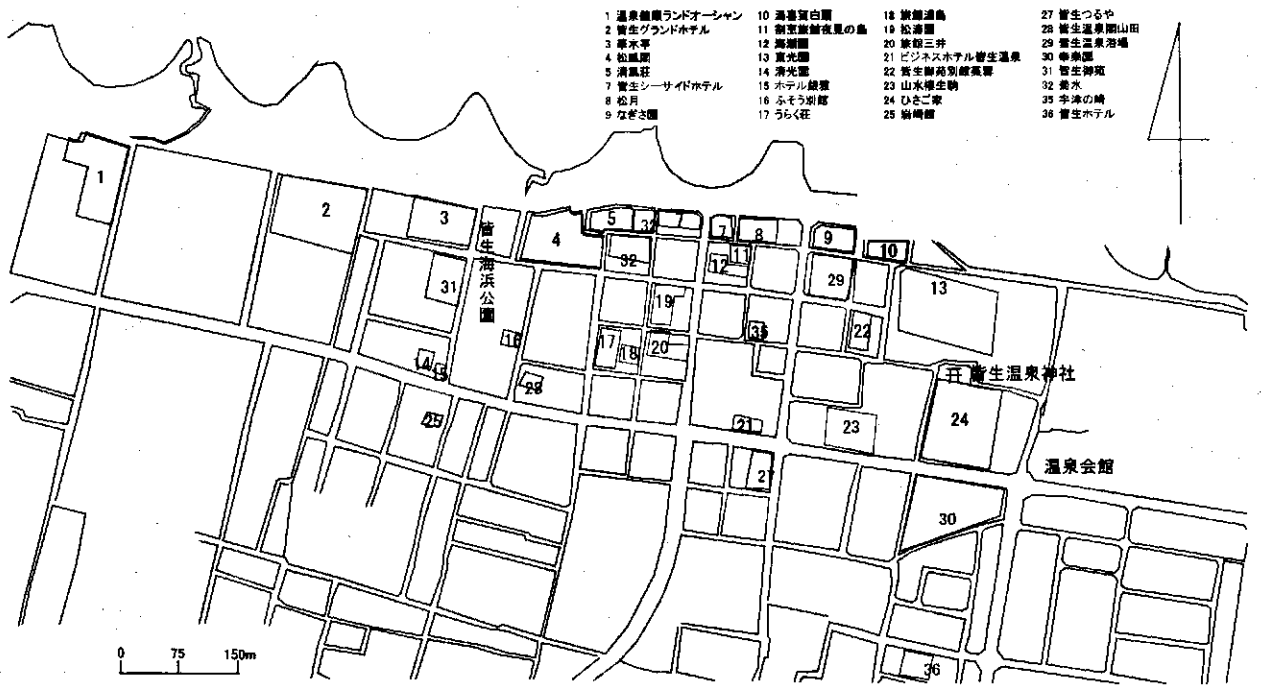
第6図 1982年の皆生温泉街の状況

- | | | | |
|----------------|----------------|-------------|--------------|
| 1 温泉旅館ランドオアション | 12 海瀾園 | 23 ホテル生駒 | 37 旅館松の江 |
| 2 皆生グランドホテル | 13 東光園 | 24 ひまご家 | 38 旅館八光園 |
| 3 蒸水亭 | 14 清光園 | 25 嵯峨園 | 39 ビジネスホテル嵯峨 |
| 4 松風園 | 15 ホテル遊楽 | 27 皆生つるや | 40 ホテル臨海 |
| 5 ホテル清風荘 | 16 別荘旅館ふもろ別荘 | 28 皆生温泉園 山田 | 41 旅館清石 |
| 7 皆生シーサイドホテル | 17 うらく荘 | 29 皆生温泉浴場 | 42 喜久屋旅館 |
| 8 松月 | 18 旅館清風 | 30 臨海園 | 43 信楽園 |
| 9 なぎさ園 | 19 松清園 | 31 皆生御苑 | 44 ホテル玉仙 |
| 10 温泉白園 | 20 旅館いとう | 32 松水 | 45 皆生温泉 |
| 11 温泉旅館夜見の島 | 21 ビジネスホテル皆生温泉 | 36 皆生ホテル | 60 みくに家 |



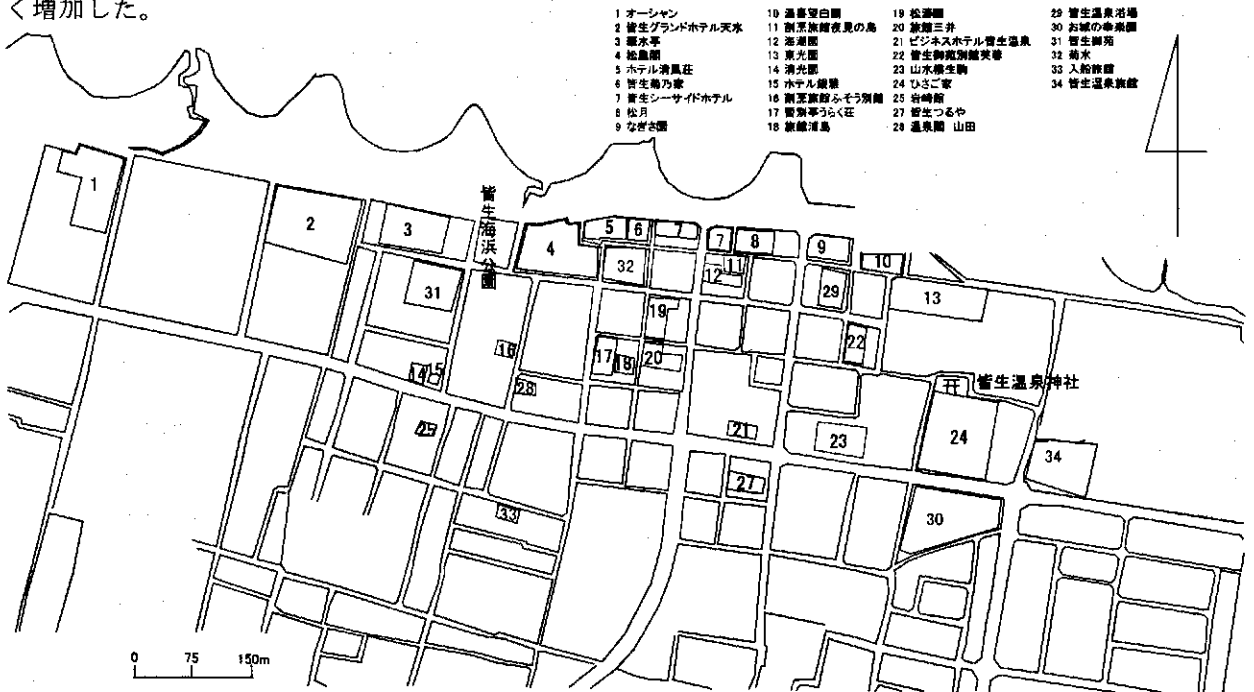
第7図 1987年の皆生温泉街の状況

1992（平成4）年には、「旅館いとう」が「旅館三井」に、「ホテル玉仙」が「皆生御苑別館芙蓉」に、「借楽園」と「松の江」が「宇津の崎」にそれぞれ立ち代わっている。また「旅館八光園」・「ビジネスホテル嵯峨」・「ホテル臨海」・「旅館満石」・「喜久屋旅館」・「みくに家」の6軒が姿を消し、30軒になった（第8図）。



第8図 1992年の皆生温泉街の状況

1997(平成9)年には、「菊水」は「菊乃家」に改名したと思われる。「宇津の崎」と「皆生ホテル」はなくなった。「入船旅館」の1軒だけが新しく見られ、旅館の数は29軒になった(第9図)。今まで「皆生温泉会館」だったところは「皆生温泉旅館」となっているが正しいのか分からない。この年には山陰・夢みなと博覧会や古代出雲文化展などの大規模なイベント等の開催を背景に宿泊者数は大きく増加した。



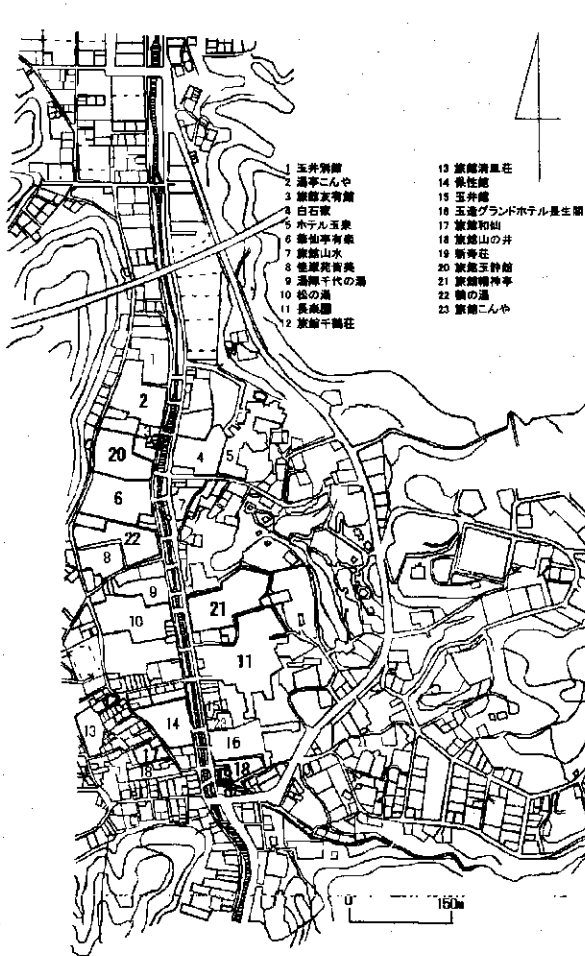
第9図 1997年の皆生温泉街の状況

2001(平成13)年には、「幸楽園」・「皆生御苑」・「入船旅館」が廃業している。「皆生温泉浴場」・「皆

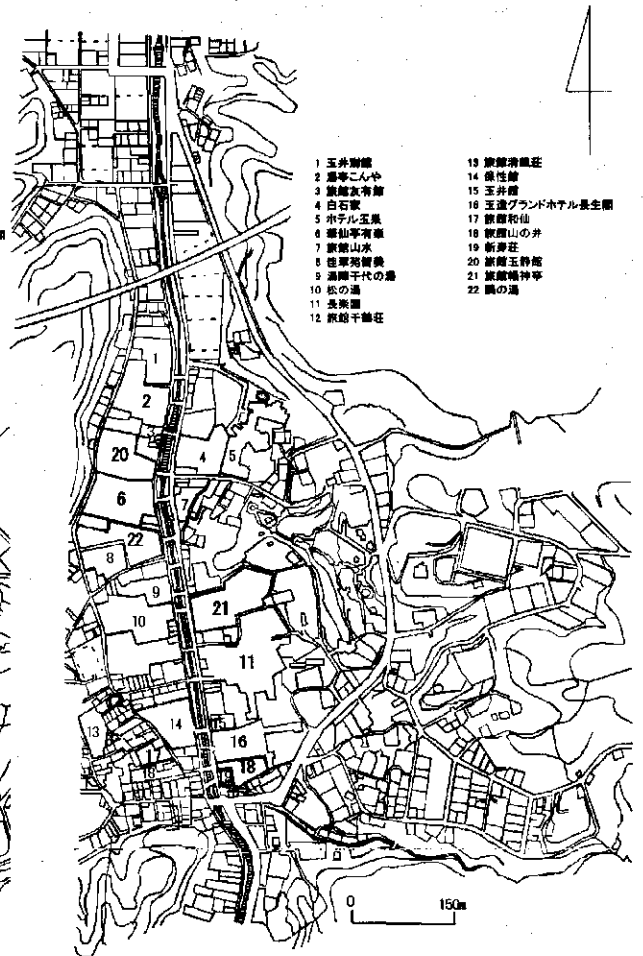
2) 玉造温泉

玉造温泉は1976（昭和51）年から2001（平成13）年の住宅地図による。

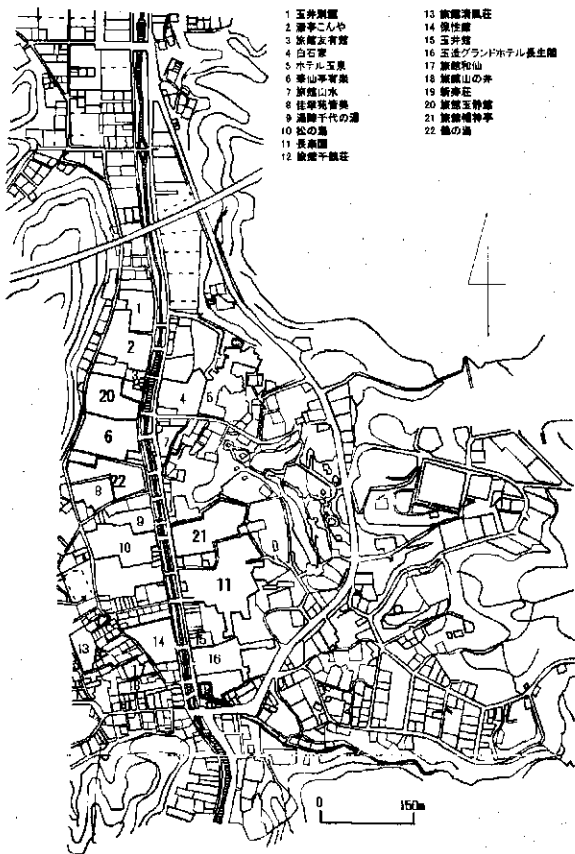
1976（昭和51）年には温泉旅館が23軒存在した（第12図）。1980（昭和55）年には「旅館こんや」がなくなって22軒になっている（第13図）。1984（昭和59）年には「山の井」が多少縮小しているだけで特に変化はない（第14図）。この年頃から再び温泉ブームがおこって、入込客数と消費額は順調に伸びている。1987（昭和62）年には「鶴の湯」がなくなって21軒になった（第15図）。1994（平成6）年には「暢神亭」がなくなり、旅館は20軒になった（第16図）。現在では「暢神亭」の跡地に「ゆ〜ゆ」が建っている。そしてここでは「旅館玉井別館」・「湯亭こんや」・「友有館」・「玉静館」・「ホテル玉泉」・「旅館白石家」・「旅館山水」・「華仙亭友楽」・「佳翠苑皆美」・「湯陣千代の湯」・「松の湯」・「長楽園」・「旅館千鶴荘」・「旅館清風荘」・「和仙」・「旅館山の井」・「保性館」・「湯元玉井館」・「玉造グランドホテル長生閣」・「新寿荘」の20軒が1976（昭和51）年から営業を続けているようだ（第4表・第17図）。



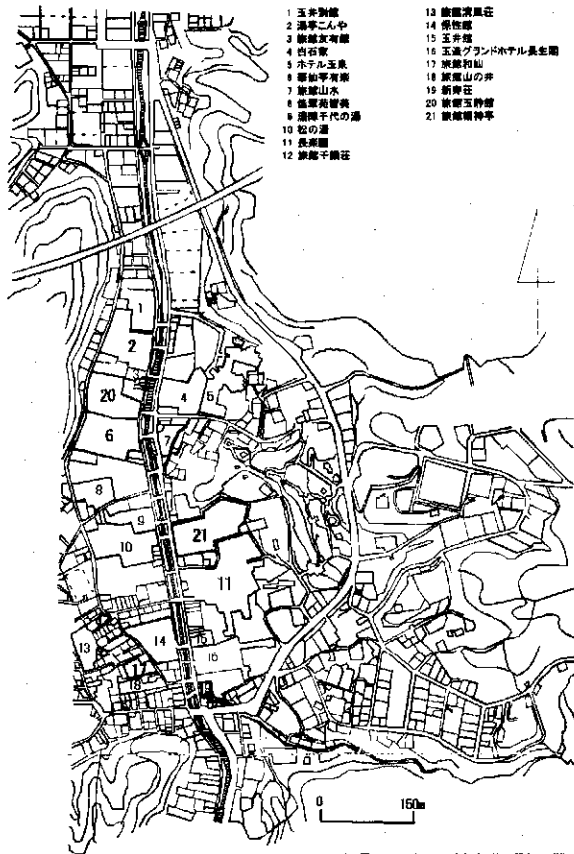
第12図 1976年の玉造温泉街の状況



第13図 1980年の玉造温泉街の状況



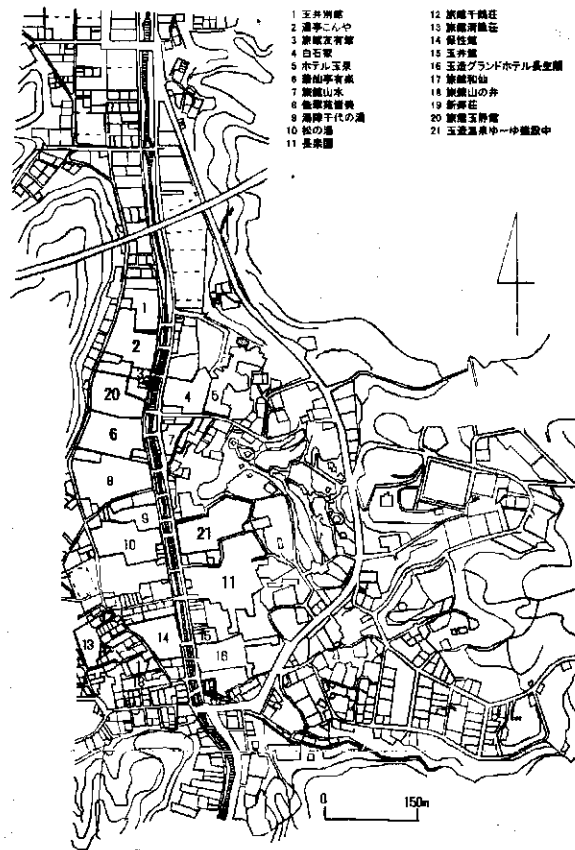
- 1 玉井別荘
- 2 湯本こんや
- 3 旅館友有齋
- 4 白石家
- 5 ホテル玉泉
- 6 兼山亭有楽
- 7 兼山亭有楽
- 8 兼山亭有楽
- 9 湯陣千代の湯
- 10 松の湯
- 11 長楽園
- 12 旅館千鶴荘
- 13 旅館清風荘
- 14 保性館
- 15 玉井館
- 16 玉造グランドホテル長生園
- 17 旅館和仙
- 18 兼山山の井
- 19 新寿荘
- 20 旅館玉井館
- 21 旅館瑞峰亭
- 22 松の湯



- 1 玉井別荘
- 2 湯本こんや
- 3 旅館友有齋
- 4 白石家
- 5 ホテル玉泉
- 6 兼山亭有楽
- 7 兼山亭有楽
- 8 兼山亭有楽
- 9 湯陣千代の湯
- 10 松の湯
- 11 長楽園
- 12 旅館千鶴荘
- 13 旅館清風荘
- 14 保性館
- 15 玉井館
- 16 玉造グランドホテル長生園
- 17 旅館和仙
- 18 兼山山の井
- 19 新寿荘
- 20 旅館玉井館
- 21 旅館瑞峰亭

第14図 1984年の玉造温泉街の状況

第15図 1987年の玉造温泉街の状況



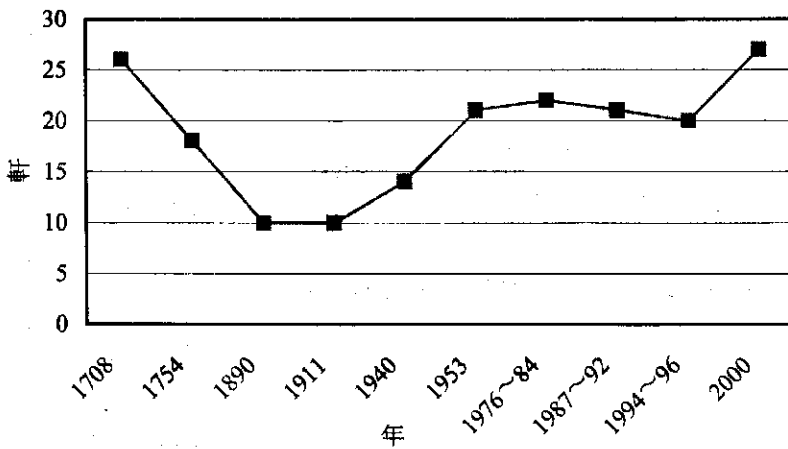
- 1 玉井別荘
- 2 湯本こんや
- 3 旅館友有齋
- 4 白石家
- 5 ホテル玉泉
- 6 兼山亭有楽
- 7 兼山亭有楽
- 8 兼山亭有楽
- 9 湯陣千代の湯
- 10 松の湯
- 11 長楽園
- 12 旅館千鶴荘
- 13 旅館清風荘
- 14 保性館
- 15 玉井館
- 16 玉造グランドホテル長生園
- 17 旅館和仙
- 18 兼山山の井
- 19 新寿荘
- 20 旅館玉井館
- 21 玉造温泉中一軒旅館中

第4表 玉造温泉の各旅館創業年数

旅館名	創業年	備考
保性館	1701(元禄14)年	
長楽園	1871(明治4)年	
松の湯	1885(明治18)年1月	
湯本こんや	1905(明治38)年	
兼山山の井	1905(明治38)年3月	
兼山亭有楽	1938(昭和13)年1月	
玉井館	1946(昭和21)年1月	明治末期「浜屋」が昭和初期に「玉井館」と改名された。
佳翠苑皆美	1952(昭和27)年1月	
湯陣千代の湯	1952(昭和27)年4月	
白石家	1952(昭和27)年12月	
玉造グランドホテル長生園	1953(昭和28)年9月	
清風荘	1963(昭和38)年10月	
新寿荘	1963(昭和38)年	
ホテル玉泉	1966(昭和41)年11月	
旅館友有齋	1966(昭和41)年	
旅館山水	1967(昭和42)年	
和仙	1967(昭和42)年?	

注)本表の創業年は各旅館、旅館組合などのアンケートに基づいたものであり、現在の場所での創業年である。そのため、本文中の創業年と異なる場合がある。

第16図 1994年の玉造温泉街の状況



第 17 図 玉造温泉の旅館数の変遷

出典)『住宅地図』各年度版を参考に筆者作成。

V 現在の温泉街

1) 皆生温泉

旅館数は 26 軒で、規模は様々である。温泉街を実際に歩いてみると新しいホテルや旅館が多い。これは、観光客の要望に応えるために改装されているからであり、中にはすべての部屋に露天風呂が設置されているホテルも存在した。温泉街の中には公園があり、少し離れた場所にはテニスコート等もある。海が近いため夏には海水浴も楽しめ、スポーツを満喫することができる。もうひとつ温泉街で目立ったのは駐車場の多さであった。各旅館の専用駐車場や従業員専用駐車場などが多くみられた。聞くと皆生温泉へ訪れる人々はほぼマイカーで来るとのことであった。戦後から発展した温泉街であるために近年の車社会へも対応できているのかもしれないが、入れ替わりの激しいこの温泉街では、廃業した建物跡が駐車場になりやすいというのが現状ではないだろうか。

温泉観光地は、療養型、保養型、歓楽型の 3 つの基本的なタイプによく分類されるが、皆生温泉は歓楽型の温泉地に属するといえよう。温泉街の中には、スナックやバー、風俗関係の施設が点在していてとても女性だけでは立ち入り難い雰囲気を持った空間さえ旅館と極近い場所にあり、歓楽街としての色彩が強い温泉地である。

2) 玉造温泉

旅館数は 27 軒と多く、その規模も大きい。ホテルの面では観光施設は充実していると言えるかもしれない。しかし、ゲートボール場、テニスコート等のスポーツ施設の不足がみられる。バーや料理屋などのナイトレジャー施設は多くあるが、玉造温泉では温泉旅館街とナイトレジャー施設は基本的に離れた場所にあり、近くでも一本路地裏に入る場所に固まって見られる程度である。

この温泉街には駐車場がそれほど多くは見られなかった。各旅館の規模は非常に大きいのにこれで収容人員分の駐車場が確保できているのか不思議なくらいであった。近年のモータリゼーションの進展に伴う、マイカーによる玉造温泉来訪客の増加に対応して、駐車場の増設が望まれているようだ。

玉造温泉は先に述べたタイプにあてはめれば、どちらかというとなりかた型であろう。玉湯川の両岸に旅館が立ち並び、温泉情緒にあふれている。足湯も玉湯川の岸にあるために温泉街を歩きながらの楽しみもある。ホテルというよりは昔ながらの旅館を楽しみ、風土性とふるさと性を満喫できる温泉地である。宣伝活動は広く行われ知名度も高い。出雲大社や松江市が程近く山陰中央部の宿泊地としての拠点性をきづいている。その土地自体の観光資源としては史跡、めのう、玉湯川両岸の桜並木、出雲玉作資料館などがある。

VI おわりに

調査を終えて改めてその違いの大きさに驚いた。行く前から違いを比較すればおもしろそうだったもののここまで明確に表れるとは思っていなかった。皆生温泉と玉造温泉はちょうど両極端にあるかのように対照的な温泉街であった。皆生温泉は戦後からの開発型の温泉街で新しく、玉造温泉は歴史深く趣ある温泉街であった。その形成の仕方では、皆生温泉は都市計画として温泉街を作り上げたのに対し、玉造温泉は昔からゆっくと旅館の数を増やし今も変わらず営業している。皆生温泉は街の移り変わりが早く、旅館も廃業しては新規営業を開始する旅館が現れる状態である。温泉街の中には一時流行った宴会型・歓楽型温泉旅行の時にできた風俗施設が点在している。しかし、これでは家族連れで安心して街を歩くことができない。現代の静かで温泉情緒豊かな温泉旅行を志向する傾向のなかで皆生温泉はなりかた型、療養型へ移行する必要があるだろう。そのためには、旅館・土産品店などのゾーンとスナック・バー・風俗関係施設などのゾーンを明確に区別する街並の整理と新たな情緒的街並の開発が必要ではないだろうか。その上で皆生温泉の大きな特徴である弓ヶ浜海岸を整備していけば、もう一度新たな発展の道が開けるのではないのでしょうか。玉造温泉は、皆生温泉に比べると、健全なイメージが強く感じられる。

スポーツ施設に関しては皆生温泉のほうが充実しているように思う。しかしこの恵まれたスポーツ環境も観光客にはうまく利用されていない。おそらくこれらの情報が伝わっていないのだろう。もっと宣伝活動を幅広く行えば、皆生温泉はスポーツ観光地として観光客を集めることができるだろう。玉造温泉には全くといっていいほどスポーツ施設はない。けれどこれは玉造温泉らしいこととも思われた。観光拠点としての役割を担う温泉地として、特に必要性がないのかもしれない。玉造温泉はこれからも情緒豊かな温泉地として、自然環境の整備、特に玉湯川の整備に力を入れるべきだろう。今のままでは整備されている個所とされていない個所の差が歴然としている。岸の桜並木は春の間はきれいだろうが、私の行った頃には毛虫に悩まされた。こちらの対策も行ってもらいたい。

皆生温泉は、旅館の入れ替わりが多い。小さな旅館だけでなく、最近ではお城の「幸楽園」と呼ばれていた大規模旅館までもが廃業した。温泉街には人が出歩く要素が少なく、各旅館・ホテルがそれぞれその館内ですべての要望に応えられるようになるために競っているようだ。協力しようという姿勢は見られなかった。このままでは、ずっと不安定な経営状態のままであろう。玉造温泉は観光客の数においては大きな問題もなく、旅館経営も安定しているようだ。こちらは相対して各旅館が非常に仲が良く、協力して営業している。1つの旅館で収容できないほど予約を頼まれた場合、他の旅館を

紹介することさえあるそうだ。しかし、マンネリ的になる不安はあり、これからは関東地方に向けて宣伝活動を行い集客に励むそうだ。

2つのタイプの全く違った温泉地で共通する部分はやはり更なる発展を望むことだろう。温泉街にある旅館は、自分の旅館だけでなく温泉街全体のためになるような取り組みに励んでいてもらいたい。それがまた各旅館に繁栄をもたらすものとなるであろう。総合的にくつろげる空間を持った温泉街を目指してほしい。

《付記》

皆生温泉湯喜望白扇支配人福本一字氏，米子市観光協会野島譲氏，玉湯町役場観光・産業課村尾勝氏，華仙亭有楽代表取締役社長井山博昭氏，玉造温泉旅館共同組合理事長松崎滋氏，協力して下さったたくさんの方々に深く御礼申し上げます。

文献・資料

山陰中央新報社（1981）：『皆生今昔—皆生温泉開発 60 周年記念誌—』皆生温泉街づくり推進協議会。

島根観光学会（2001）：『島根の観光戦後の軌跡（1945 年～2000 年）』島根観光学会。

玉湯町立出雲玉作資料館（1997）：『湯乃助支配—江戸時代の玉造温泉—』玉湯町立出雲玉作資料館。

玉湯なんでも大事典編集委員会（2000）：『玉湯なんでも大事典』玉湯町教育委員会。

野本晃司（1995）：『山陰の観光地理』山陰観光研究会。